

■研修会名 NMBP 実技研修会

■研修期間 8月11日、12日

■研修場所 戸山サンライズ

■参加者 高下心輔

1 研修の概要

NMBPとは、(Nakamura Movement Basic Program) 横浜の中村特別支援学校が自立活動の時間における「うんどう」の教科書づくりを基にして、誰にでも必要となる中心的なプログラムISP (individual standard program) とその発展的な要素を含んだISP+αをまとめた運動プログラムである。ISPは、静的弛緩法をベースに感覚統合法や生理学、解剖学などを組み合わせた「うんどう」プログラムである。

2 研修に参加して

講義では、NMBPとは何か。NMBPが生まれた経緯について学んだ。基本的な考え方は以下の通りである。

- ・教育としての「うんどう」指導
- ・発達に基づいた教育的指導法
- ・コミュニケーションとしての働きかけ
- ・安全指導の観点

また、ISPの実技研修では、2人1組となってプログラムを始めから体感した。実際に体感することが非常に重要であり、触れる場所、触れ方、感じ方を話し合った。

- ・手の学習
- ・遠近の学習
- ・足の学習
- ・身体への気付きの学習
- ・お腹の学習
- ・胸の学習
- ・首の学習
- ・のどの学習
- ・腰の学習
- ・背中の学習 など

講義を通じて「うんどう」の学習が自立活動の6区分にアプローチできる考え方を学ぶことができた。今後の自立活動の時間に活かしていきたい。

■研修会名 夏季集中研修会

■研修期間 8月5、6、7、8日

■研修場所 かがわりハビリテーションセンター

■参加者 高下心輔

1 研修の概要

4日間のプール研修で3つの大きなねらいがあった。1つは、生徒の実態把握をし、課題を設定し、評価を行う。2つ目は、講義においてプールの専門的知識を学ぶ。3つ目は、模擬実践を行いプール指導における技術の向上を目指す。4日間で6回プールに入り、体験的・実践的に研修を行った。

2 研修に参加して

講義では、プール活動が障がい種を問わず、誰にとっても有効であるということを知ることができた。その他、障がい種の特性に応じた指導、補助具の使い方・考え方、高松養護学校のプログラムについて学ぶことができた。また、実践発表でプール指導による成果を具体的に学ぶことができた。

実践では、中学2年生の生徒を担当し、保護者や本人から情報を集め、実態把握を行った。4日間で目標を定め、評価を行うことで実践的な力を身に付けることができた。プール学習が日常生活で生きるように考えて取り組めたので、生徒本人が達成感や充実感を味わうことができた。

また、県外から参加している特別支援学校のプール指導について情報を交換することができ、他県の実情を知ることができた。

■研修会名 筑波大学公開講座

■研修期間 平成25年8月18日

■研修場所 筑波大学東京キャンパス文京校舎

■参加者 角原 佳介

1 研修の概要

自閉症児のコミュニケーションと情動発達を支援する

SCERTS モデルについて

背景・構成と理論・アセスメント演習・適用校の紹介

2 研修に参加して

背景

最近の自閉症スペクトラム児の研究で、中核障害として①共同注意②「心の理論」心の読み取り③情動の表出・調整が言われるようになってきた。情動表出の制限や共同注意への非随伴性はコミュニケーションを一層制約することが予想される。以前は問題行動とは、行動障害や二次障害であるという考え方が一般的だったが、これらの研究によって情動のアセスメントと支援が必須と考えられるようになったのである。その他の研究として、IDEA（障害のある個人のための教育法）での IFSP（個別家族支援計画）で子どもに関わる人の支援とアセスメントの必要性が上げられている。そして NRC では、自閉症児教育の優先的項目について上げられている。これらの基礎研究を受けて誕生したのが SCERTS モデルである。

構成と理論

SCERTS モデルでは3つの領域を扱う。SC 社会コミュニケーション ER 情動調整 TS 交流型支援 それぞれ3領域の頭文字をとって SCERTS である。発達によって段階があり、社会パートナー段階、言語パートナー段階、会話パートナー段階に分けられる。それぞれの領域には下位の要素があり、SC—共同注意とシンボル使用 ER—相互調整と自己調整 TS—対人間支援と学習支援、専門家支援、家族支援が存在する。

SC では、コミュニケーションを目的と手段に分けて捉えており、共同注意が目的、シンボル使用が手段にあたる能力である。共同注意とは、SCERTS では広義に捉えられており、情動の共有、注意の共有、意図の共有も含まれてくる。共同注意にも発達段階があり、支えられた共同注意→子どもからの共同注意→注意の調整→今ここにはない出来事への共同注意となっている。共同注意におけるコミュニケーションの伝達意図は①行動統制②社会的相互作用③共同注意に分けられる。

シンボル使用とは、コミュニケーションのときに用いるシンボルに関する能力である。言語もコミュニケーションのシンボルの一つであり、前言語期でも使用できるシンボルは存在する。使用するシンボルが特定の場面や人でしか意味を共有できないものから、慣習的なシンボル、より社会的な意味を持ったシンボルへと発展させていくことでコミュニケーションの手段が広がっていく。ことばは唯一のコミ

コミュニケーションシンボルではないが、過去の出来事や空想の出来事まで象徴することができるなど、より高次のコミュニケーションが可能になってくる。

ER では相互調整と自己調整である。情動調整は、情動の抑制、つまり感情が高ぶったときにそれを抑える力だけではなく、自身の情動を表出する力も含まれている。以前は問題行動が起きたときに、その行動が起こった状況と機能を捉え、問題行動が起きないように状況を整えたり、別の社会的な行動に替えたり、という考えが中心だったが、そこに情動調整という考え方が加わる。極度の調整不全から回復する手段を持つことで、問題行動に対する予防にもなる。調整するための方略として、行動方略、言語方略、メタ認知方略が存在する。これは情動調整の発達水準になる。

TS では、対人間支援、学習支援、家族支援、専門家支援とあるが、主に対人間支援と学習支援が中心となってくる。対人間支援では、クラス担任など身近な大人やピア（同世代の子ども）に対する支援である。聴覚過敏の子どもに対して大きな声で話す、自閉症スペクトラム児に対してたくさんの言葉で話すなど、当たり前のことも含め、反応、促しなどかかわり方について考えていく。学習支援では、活動の構造についてや、目標の修正、視覚的援助についてなど、主に学習環境について考えている。

SCERTS モデルでは、ST や OT を含めた一つのチームを作り、小目標に対して週25時間（授業ではなく日常生活における指導として）取り組んでいく必要がある。それらは、日本の現状の体制では不可能となっているのが課題の一つである。日常生活で取り組んでいくということは、学習転移型ではなく、文脈横断型であるということだ。特定の場面で学習したことを、場面や人を変えて般化していくのではなく、最初から日常生活に目標や指導場面を組み込み、より自然な、様々な文脈で指導していくのである。まだまだ世界的にも実践が少なく、国内では馴染みのない SCERTS モデルではあるが、自閉症スペクトラム児と向き合っていく上での新しい包括的アプローチである。

■研修会名 発達協会実践セミナー

■研修期間 7月29日30日

■研修場所 東京ファッションタウンビル

■参加者 角原 佳介

1 研修の概要

「ことばの育ちを支援する」

	10:15～11:45	13:00～14:30	14:50～16:20
7月29日	「ことばの発達とその障害」 東京学芸大学 教育実践研究支援センター 大伴 潔	「聴く力を高める」 筑波大学大学院 廣田 栄子	「自閉症児のこどもとのコミュニケーション」 兵庫教育大学 井澤 信三
7月30日	話しことばの障害とは 北里大学 原 由紀	前言語期からことばへ 東京福祉大学大学院 立松 英子	暮らしの中でことばを育てる 大阪府立大学 里見 恵子

2 研修に参加して

講座1 「ことばの発達とその障害」

共同注意の成立がコミュニケーションの基礎といわれる。「指さし」や「ほら、見て」は全て注意の共有を前提としており、注意を共有している事物について会話が進んでいく。共同注意が成立している状況において命名が可能なのである。

ことばは語彙の数だけではなく、その機能が大事である。言語とコミュニケーションは異なるものであり、ことばや言語をもつ以前の段階でもコミュニケーションは行われている。欲しいものに手を伸ばす行為は「原命令」と呼ばれ、相手と、相手に注意を向けてもらいたいものとを交互に見る行為は「原叙述」と呼ばれる。

ことばに遅れがあるというのは3領域が存在し、①対人的なことばの使用（語用論）②発音すること③語彙の知識、文法能力がある。自閉症の児童は①と③が主である。ことばの発達を促すかかわり方として、1入力調整（ことばかけの工夫）2ルーティンの活用（文脈に沿った語りかけ）3環境調整などがある。これらのことを意識しながら、より自然なかかわりを大切にしていける必要がある。

講座3 「自閉症児のこどもとのコミュニケーション」

自閉症スペクトラム障害児への社会コミュニケーションでは、①社会的相互作用への動機付けの問題②社会的相互作用における行動上の問題が課題として指摘されている。社会コミュニケーション行動を指導する際に表出と理解に分けて捉え、さらに表出は要求（マンド）と叙述（タクト）に分けて捉えことができる。直接的好子が得られる分、要求の方がみられやすい。要求場面として①欠品充足②時間遅

延③行動連鎖中断法④活動や物品の選択肢などがある。それらの状況を設定し、具体的方法として、①機会利用型指導法②時間遅延法③マンド・モデル法などを活用して指導していく。

講座5 「前言語期からことばへ」

障害のある人が発達に偏りがあり、不均衡であるが、人間の発達であるためその順序は同じである。発達段階を正しく捉え、段階に合わせた教材を選択し、指導していく必要がある。

Stage I 触って動かして分かる世界 Stage II～III—1 見て分かる世界 Stage III—2 言葉とイメージの世界 I から II へ移行するときに、立体の課題から平面の課題に変わる。この移行の仕方に注意する必要がある。

子どもは良い環境があればいくらでも学習していくことができる。子どもが分かる世界に応じた教材・教具を用いて環境を整え、学習を助けていくことが大切である。

講座6 「暮らしの中でことばを育てる」～インリアル・アプローチ～

自閉症スペクトラム児のコミュニケーションは自然には育たない。大人との1対1のかかわりの中で学び、育っていく。インリアルでは、子どもの問題と大人のかかわりの相互関係の視点を大切にしている。大人のとるべき姿勢としてSOULを忘れてはいけない。

Silence—子どもを静かに見守り Observation—子どもの興味や遊びを観察し Understanding 子どもの気持ちや発達段階を理解し Listening 子どもが言おうとしていることに心から耳を傾ける

・子どものリズムにあわせていますか？ ・子どもの開始を待っていますか？ ・子どものすることをよく見えていますか？ ・子どものことばに耳を傾けていますか？ ・子どもの意図や気持ちをよく理解していますか？

ビデオでコミュニケーション場面を録画し、その場面を分析し、上記の基本姿勢を意識しながらよりよいかかわりを考えていくものである。